
のろのろまこちゃん

七瀬なな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

のんのんまこじちゃん

【ZPDF】

Z0615D

【作者名】

七瀬なな

【あらすじ】

保育園へ通う、のんびりやさしい「まこちゃん」のお話です。

まいちやんは、あしか幼稚園の年長さんです。

本当に野々宮まい、という名前なのですが、みんなは、まいちやんを「ののりまいまいちゃん」と呼んでいます。

年長組のおともだちは、まいちやん本人の前で堂々と、ふわけてつついたりしながら。

そして保母さんたちは、保母さんたちだけの会話の中で、じわりと。

保母さんたちは、まいちやんの動作がのろいのを、ひそかに心配していました。

もしかして体があつむて、軽い欠陥でもあるのではないかと。

どうしてまいちやんが、いつも呼ばれるようになったかといつと、ふだんから1テンポも2テンポも、他の子より動作が遅れるのも、もちろんですが、まいちやんは本当にのろい、という事実を、きつぱり裏づける出来事が、毎日のように繰り返されるためなのです。

あしか幼稚園の年長組は、お家に帰るとき、だれが一番はやく門まで着くかを、お天気のよい日は必ず、競争していました。

一番の子から順番に、門をぐぐって帰れることになっていたのです。

「よーい、どん！」

ぱん、と保母さんが手をたたくと、どの子も一番になりたくて、キヤーキヤーと歓声をあげて、押し合いくし合しながら、げた箱へ突進します。

ある子は前を行く子のスモックをひっぱつたり、保母さんの皿が

とじかないとじれで、邪魔者をつわびせしたり、ひっぱたいたりもしていたのです。

保母さんたちが元気のよい子供たちの姿を、満足げに見守っていました。

ところが、まいちゃんだけは、どうこつわけか競争に参加しようとしないのです。

おともだちのみんなが、なだれをうつて表に飛び出していった後。まいちゃんはおもむろにカバンをとつあげ、帽子を深くかぶり、げた箱のスノーフに座つて、おともだちが巻き起しつた土けむりを、手でぱたぱた払いながら靴をします。

おともだちのみんなが、靴をちゃんととはかず、かかとをふんで、つつかけたまま列に並び、並んだあとで改めて靴をはきなおすに、まいちゃんは、きちんと靴をはくまで歩きだそつとしません。

だから、一番や二番や、真ん中あたりや、ビリから一番田なんかは毎回顔ぶれがちがつのですが、ビリは決まって、まいちゃんなのです。

おともだちは、まいちゃんを指差して笑い、保母さんたちが悲しげに首を振ります。

しばりくせあつと、じんな調子でした。

最初、笑い転げていたおともだちが、そのつち笑わなくなくなりました。

みんな、まいちゃんに待たされるのに、だんだんウンザリしちゃいましたからです。

「のこのこの、まいー。」

「おひはやしたてながら、まいちやんを小突くおともだちの数も、小突く強さも、その回数も、田舎しにエスカレートしてゆきます。わざがこマイペースのまいちやんも、考え込まずにはこいれませんでした。

まいちやんは、自分がのろいのを知っていました。

けれどそれが悪いことだとは、ちつとも思っていなかつたのです。

……どうやら、やうではなこいらしげ。

まいちやん一人だけ、他の人と考え方がちがうと、みんなと同じに一番を勝ち取るためにがむしゃらにならないと、おともだちも保母さんたちも、戸惑つてしまつみたいです。

でも、まいちやんは、自分がのろいのを知っていました。

他のおともだちのように、後ろから突き飛ばされても、転ぶのを踏みどりまつて、すばやく体勢を立て直し、突き飛ばした相手にヒジ鉄をくらわせるよくな芸当せ、とてもできれいにありません。

それでも、みんなと一緒に一番を取りたがらないと、みんなは納得しません。

やじど、まいちやんは、とつあえず一所懸命なフリだけでも、してみることにしました。

「よーい、どん！」

保母さんの掛け声で、いつもどおりに、みんな大騒ぎで外に飛び出します。

まいちやんは、怪我をしないよう、一呼吸おいてから、あわてた風をよそおつて、昨日までより乱暴にカバンをひつたくると、帽子も頭に乗せず、靴を地面に放り投げ、スノーボードには腰をおろせず、かとを踏んで、急いで走る真似をしました。

本気で走つてはいないので、本当せうつとも勘つてないのですが、
あはあと荒い呼吸をわざと繰り返します。

お芝居は大成功です。

「ピリオドですが、みんなは、とくに保母さんたちは、まいちゃんがやつと、やる気を出してくれたと、とても喜んでいました。

正直に書つと、まいちゃん自身は、カバンを乱暴に取り上げるのも、帽子を手に持つたまま、靴もきちんとはかないで走るのも、あんまり気持よくなかつたのですが。

だつて、カバンをあんな風に肩にかけると、反動でカバンが体に当たつて痛いし、靴のかかとを踏んで走つたりするのは、今にも転んでしまこやつで、おつかないのですもの。

けれど、まいちゃんの本音はお構いなしに、みんなは嬉しそうです。まいちゃんが、嬉しそうなフリで、にこにこしながら、やれやれ…といつため息をついたことに気づいた人はいませんでした。

こんなに大変な、不自然な努力を頑張つてしたのに、まいちゃんの平和な日々は、長続きしませんでした。

フリがばれたのではありません。

むしろ、そのフリが、あまりにも上手すぎたための悲劇と言えるでしょう。

一応、やる気だけは見せたものの、相変わらずまいちゃんはピリオド抜け出せないです。

一所懸命がんばつても、ピリオドまいちゃん。
本当に、のんのんなんだ。

努力が認めてもらえたのは、最初のうちだけ。

成果があがらないと見るや、人々は失望を隠さなくなりました。

……おしゃべりが足りないのかもしね。

まいちゃんは、こう考えました。

……よし、じゃあ明日から、ビリになつたら、うんと悔しそうにしてみよ。本当に、ビリは嫌なんだって顔をするんだ。

やつてみました。

逆効果でした。

子供たちを一列に並ばせたまま、保母さんたちが集まつて、なにやら相談しています。

保母さんたちが、ちらちらと自分のほうに走らせながら、低い声で話し合つてゐるのを、まいちゃんは見逃しませんでした。

「ねえ、みんな」

一人の保母さんが、子供たちをぐるっと見回しながら話しあじめました。

「いつもまいちゃんがビリなんて、かわいそうよね。だから今日はとくべつに、一番うしろの人から順に帰ることにしました」

ええーっ、とこう不満の声が、おともだちの口からこつせこつこあふれ出します。

まいちゃんは、おなかの中が、きゅうとじめつけられたような感じがして、息がつまりそうになりました。

その感じは、おともだちに押されて、転んでひざ小僧をすりむく痛さより、いやなものでした。

「はやく行けよ、のろのろまじー」

ずっとはなれた所から、男の子が叫びます。一番か一番か、きつ

とつりでなく、真剣に一番になりたくて頑張った子なのでしょ。まいかちゃんは動けませんでした。せばにいた保母さんが、見かねて手をひいてくれるまで。

『じつじつ、ほつほつおこしてくれないのよおつー。』

まいかちゃんは保母さんたちに腹を立てました。

あたしは、かわいそなうなんかじゃなかつた。

一番なんか、はじめからじつでもよかつた。

じつだつて、前に並んでるおともだちより、ほんの少し待たされただけで、一度とねうちで帰れないわけじやないんだもん。

それより、スマックもカバンもぼうしもクツもきちんとして、ケガしなこよひ、転ばなこよひ、ゆづくつ歩いて帰りたかつただけなの。

それさえあきらめて、みんなが安心できるよつこ、みんなと同じよつこ、一番になつたこよつなつりまでしてみせたのに！

あたしは、かわいそなうなんかじやない。

かわいそなのは、今口、一番になつた子よ。

あの子の努力は、じつなるのよ！

自分が傷つくかもしぬない、おともだちを傷つけてしまつかもしれない、そんな恐怖をかなぐり捨てて、一番をめざしてつき進んだ、あの子のことを考えると、申し訳なさで胸がいっぱいになる、まいかちゃんでした。

まいかちゃんはよく転ぶので、転んだ痛むは身にしみています。

だからまいかちゃんはよく転ぶので、転んだ痛むは身にしみています。他の子が転んだ痛さもわかるし、ましてや、自分が他の子たちに痛い思いをさせたなんて……。

『明日もあたしがビリになつたら、また、一番になつた子が撲をするかもしない』

背筋が急に冷たくなつて、まいりやさんは思わず、ふるふるひとつ身ぶるこをしました。

『明日からせつこでなく、本気を出しても、ビシにならなければいけないやー。』

「よーい、ビシー！」

次の日のまいりやんは、決心したとおり、頑張りました。

結果は… ビリから四番め！

ビリから四番めです！

ビリじゃありません！

ねむり、とこひよめが、周りのおともだちや保母たちから湧き起ります。

拍手だつて聞こえます。

まいりちゃんは、泣き出しちゃいました。

みんなには、うれし涙に見えたみたいです。

けれど、まいりちゃんの本当の気持は、ちがいました。

これから毎日、こんな思いをしなくてはならぬ。

みんなは喜んでくれているけれど、本当に、わくとも

自分のしたことではない。だのに、

みんなと同じことをして、

みんなと同じ反応をしなければ、自分を認めてもうれない。

だれも自分をわかつてくれない。

「それでも、まいりちゃんは保育園が好きでなかつたのだけれど、ますます好きでなくなつてしましました。

わい、まいちゃんがあまり好きでない保育園の中でも、もつとも好きでない行事が、運動会です。

他の子との競争に熱心になれない上に、動作のゆっこまいちゃんにとつては、針のむしりです。

ただ唯一、気楽なのは、帰りの競争のよひに保母さんのおひこきがない点です。

頑張った子や、本当に足の速い子が損をすることはないのですか

い。

それでもやはり、大勢の前で六人ずつ一列に並ばされ、走らされるのは苦痛でした。

他の五人がとっくに「ゴールイン」した後、まいちゃんはたった一人で観衆の視線を浴びて走ります。

その間じゅう、ずっと「自分はだれよりも走るのがおそい」という事実を、晴れの舞台で証明しつづけなくてはならないのです。

「あーあ、かけっこ、いやだなあ

もうすぐやつて来る出番を待つて、あらかじめ、ふり分けられたとおりに行儀よく並び、入場門の下でしゃがみこんでいる、まこちゃんたち年長さんのグループ。

まいちゃんの右横の女の子が、ため息まじりに、つぶやきました。

「あたしも走るのきらい。おそいんだもの。ねえ、手をつないではしない?」

左横のおともだちが、まいちゃんの頭、元、元、元を返します。

「なに言つてんだよ。おまえらトクしてるんだぞ。だつてまこと走るんだもんな。どんなにおそくたつて、ビリから二番めなんだから

まこちゃんの後ろでしゃがんでいた男の子が、まこちゃんを「じつ
きながら口をはさみました。

「じつかれたまこちゃんはバランスをくずし、あやつく前につんの
めつてしまいそうになるのを、どうにか手をついて防ぎました。

両側の女の子一人は、互いの顔を見つめあい、次に、真ん中のま
こちゃんに田をやつてから、くすくす笑い出しました。

右側の子は下を向いて、左側の子は口をおさえて。

まこちゃんは大きな田をぱちぱちさせて、涙が落ちそうになるの
を、じらえました。

「こんな田にあつと、いつそ早く順番が来て、わっさと恥をかけて
終わらせたいと願う、まこちゃんです。

「ピーツ！」

入場門の横に立っている保母さんが、笛を吹きました。

いよいよ、まこちゃんたちの番です。

しゃがんでいた年長組のみんなが、保母さんの先導でスタートラ
インの一メートル手前まで行進します。

先頭グループ以外の子たちは、そこド再び、しゃがんで待ちます。

まこちゃんは背が低いほうなので、先頭グループです。

他の五人と一緒にスタートラインに着きました。

去年の運動会までは三十メートル走で、直線コースだったのです
が、年長さんになると六十メートルを走ります。

グラウンドを半周しなくてはなりません。

ぐぐつと緊張でこわばった表情をして、豆走者たちは白線の前で
スタートの合図を待ちます。

「……よつこ

パン！

空気を切り裂くペストルの音に、一瞬ビクンと身をすくませる、
まいひちやん。

おともだちのみんなは、会団ととわリラインからこっせこに飛び出しています。

スタートからじい、ぱりひつ差をつけられてしまっています。

まあ、いいや。いつたん走り出しちゃすれば、笑い者になるのは、
あつちのホールに着くまでだけだもの。
しんぼうしんぼう。

おだんご状態で接戦を繰り広げるおともだちから、ずいひつと、ず
いひつと遅れて、まいひちやんはトトトテと、あくまでもマイペー
スを崩しません。

おだんごになつたおともだちの群れが、ちゅうどカーブにさしか
かつたときのことです。

あつ！

声を嗄らして応援に熱中していた父兄も保母さんも、子供たちも、
その場にいたみんなが息をのみました。

先頭の子が、つまずいたのです。

あとに続くみんなも、足をとられて次々と、しゃがみ倒しに地面
に転がりました。

ずいひつと後ろにいたため、ただ一人難をのがれたまいひちやんは、
さあ、どうしたでしょうか？

ふつのナよつは、まひぱり遅にのですけれど、それまでよつもあきらかにペースをぐるぐる上げてきています。

しかも、その時のまひちゃんの表情ときたら。

本当に本当に本気です。

まひちゃんなりに、全力をつくしています。

ただのフリなんかではありません。

「まあ、あのまひちゃんが！」

「はじめて一等をとれるかもしれない！」

「しつかり！ まひちゃん！」

観衆が、まひちゃんと声援をおくり始めました。
といろが。

土けむりの中でもがいでいるおともだちのところまで行くと、なんとまひちゃんは、なんの迷いも、惜しげもなく立ち止まつ、かがみこんでしまったのです。

「だいじょうぶ？」

肩を上へさせ、せひつ腹をおさえながら、転んだおともだちに、片手をのばしてこなめます。

全員が、あつにとられてしましました。

真っ先に自分を取り戻したのは、こなてしまつ前までは三番田へらいを走っていたおともだちです。

「かけっこ、いやだなあ」

と、まひちゃんの右横でつぶやいていた子です。

その子は、すくと立ち上がり、ゴールをめざして残りの距離を一田散に駆けてゆきました。

すると、取り残された子たちも、ハツとして、必死であとに続きます。

あちこちすりむき、泥だらけのまま、血を流しながら。
ある子は、びっこをひきながら。

おともだちが、また元気に走り出したのを確かめると、よつやくまじやんも、「ゴールに向かいました。
ほほとしたような笑顔を浮かべて。
マイペースで、トテトテと。

(後書き)

最後まで読んでくれて、ありがとうございました。

えと、この作品はいつだつたか、高校時代の友人が就職した先に、小説の個人誌を発行してゐるひとがいて、なっちゃんもなにか書いてみない？と誘われて、ひねりだした作品でした。

自分の保育園時代の思い出が下地です。

まあ、どこからが実話で、どこまでが脚色か、ということは、『想像におまかせします、といふことで。

つたない習作ですけども、当時はわりと『好評』いたので、ホッと胸をなでおろした記憶があります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0615d/>

のろのろまこちゃん

2010年10月8日13時40分発行